

比率が低くなる。特に深鉢の比率が前段階に引き続き低下する傾向にある。一方で台付深鉢9%(15点)、注口6%(10点)と、3器種以外の器種が一定の比率を占めるようになる。

IV 5期は深鉢14%(20点)、壺22%(32点)、鉢28%(41点)であり、3器種のほかに注口が12%(17点)と一定の比率を占めるようになる。また、台付皿と単孔がそれぞれ5%(7点)、皿が4%(6点)と本群に特徴的に認められる器種が一定数を占める。深鉢は前段階に引き続き、さらに比率が低下する傾向が看取できる。また鉢の比率が比較的高いが、これは深鉢と鉢の器種設定を幅と器高の比率に拡げたため、深鉢の口縁が大きく聞く傾向がある本群においては、深鉢ではなく鉢に分類されたものが多くなったことに起因するものと考えられる。

IV 6期は深鉢18%(30点)、壺12%(20点)、鉢20%(34点)、注口21%(35点)であり、壺と注口の比率が逆転する。ほかに台付鉢が9%(15点)と比較的高い比率を示す。また、前段階まで若干量であった香炉が4%(6点)と一定の割合を占めるようになる。前段階と同様に鉢の比率が高いが、これも前段階と同様の理由に起因するものと考えられる。

IV 7期は深鉢32%(9点)、壺4%(1点)、鉢7%(2点)、注口29%(8点)のほかに、香炉が14%(4点)と前段階よりさらに比率が高くなる。資料点数は少ないものの、壺が激減し、注口の比率が増加する傾向を指摘できる。

器種ごとにみると、IV 1期においては器種組成が深鉢のみであったものが、IV 2期に深鉢以外の器種が組成に含まれることにより、深鉢の占める割合が50%弱となる。その後深鉢の比率は徐々に低下し、IV 5期においては14%まで落ち込む。一方、鉢はIV 2期からIV 4期にかけては20%弱であったものがIV 5・IV 6期には25%前後と増加傾向にある。深鉢と鉢の合計比率は、IV 4期からIV 6期にかけてはいずれも40%前後で推移することから、IV 4期からIV 6期にかけて深鉢の口縁が強く聞く傾向にあり、結果的に鉢と分類されるものが多くなったものと考えられる。IV 7期になると再び深鉢の比率が高くなるが、これは、前段階と比較して口縁部の開きが強い例が減少したことによるものと考えられる。

壺と注口の比率を見てみると、IV 4期に注口が器種組成に加わった後、IV 7期に至るまで注口の比率は時期を追うごとに増加し、それに対応するように壺の比率は低下する。このことから壺と注口の用途には密接な関係があるものと推定される。

以上の様相から全体的な傾向をまとめる。IV 1期においては深鉢のみであったものが、IV 2期では多様な器種が認められるようになる。ただし、深鉢・壺・鉢の3器種で全体の90%以上を占めており、その他の器種はいずれも若干量である。IV 3期も同様に前述の3器種で全体の80%以上を占める。その他の器種はいずれも若干量であるものの、該期に特徴的に認められる片口が一定数を占める傾向が看取できる。IV 4期には前述の3器種のほかに、当該期に新たに加わる注口が一定の比率を占めるようになる。ほかにも多様な器種が認められることから、結果的に前述の3器種の合計比率は低下する。IV 5期においては、3器種の合計比率はIV 4期とほぼ同様の傾向を示すものの、深鉢と鉢の比率が逆転し、注口の比率が増加する傾向が認められる。また、この時期に特徴的な皿・台付皿・単孔が一定の比率を占める。IV 6期には壺と注口の比率が逆転する。IV 7期には再び深鉢の比率が鉢より高くなり、また注口の比率が前段階よりもさらに高くなる傾向がある。

第61表 捨て場・遺構外揭露土器器種組成

器種	N2		N3		N4		N5		N6		N7		N8		総計 点数
	点数	組成比	点数	組成比	点数	組成比									
深鉢	137	47%	44	32%	47	27%	20	14%	30	18%	9	32%	6	33%	293
鉢	46	16%	25	18%	29	17%	41	28%	34	20%	2	7%	2	11%	179
深鉢・鉢	0	0%	0	0%	1	1%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	1
壺	89	31%	47	34%	41	23%	32	22%	20	12%	1	4%	1	6%	231
壺・注口	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	4	2%	1	4%	0	0%	5
注口	1	0%	0	0%	10	6%	17	12%	35	21%	8	29%	8	44%	79
注口(深鉢・鉢)	0	0%	0	0%	0	0%	3	2%	2	1%	1	4%	0	0%	6
台付深鉢	0	0%	1	1%	15	9%	0	0%	1	1%	0	0%	0	0%	17
台付鉢	8	3%	2	1%	6	3%	5	3%	15	9%	0	0%	1	6%	37
台付壺	0	0%	0	0%	1	1%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	1
台付皿	0	0%	0	0%	0	0%	7	5%	3	2%	0	0%	0	0%	10
片口(深鉢・鉢)	0	0%	2	1%	6	3%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	8
片口壺	1	0%	5	4%	3	2%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	9
單孔	0	0%	1	1%	2	1%	7	5%	3	2%	0	0%	0	0%	13
香炉	0	0%	0	0%	0	0%	1	1%	6	4%	4	14%	0	0%	11
異形台付	0	0%	0	0%	0	0%	3	2%	0	0%	0	0%	0	0%	3
皿	0	0%	0	0%	0	0%	6	4%	0	0%	0	0%	0	0%	6
切断蓋付壺	3	1%	0	0%	1	1%	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	4
小型土器	5	2%	12	9%	12	7%	5	3%	10	6%	2	7%	0	0%	46
多孔底	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	2	1%	0	0%	0	0%	2
その他	2	1%	0	0%	1	1%	0	0%	2	1%	0	0%	0	0%	5
総計	292	100%	139	100%	175	100%	147	100%	167	100%	28	100%	18	100%	966

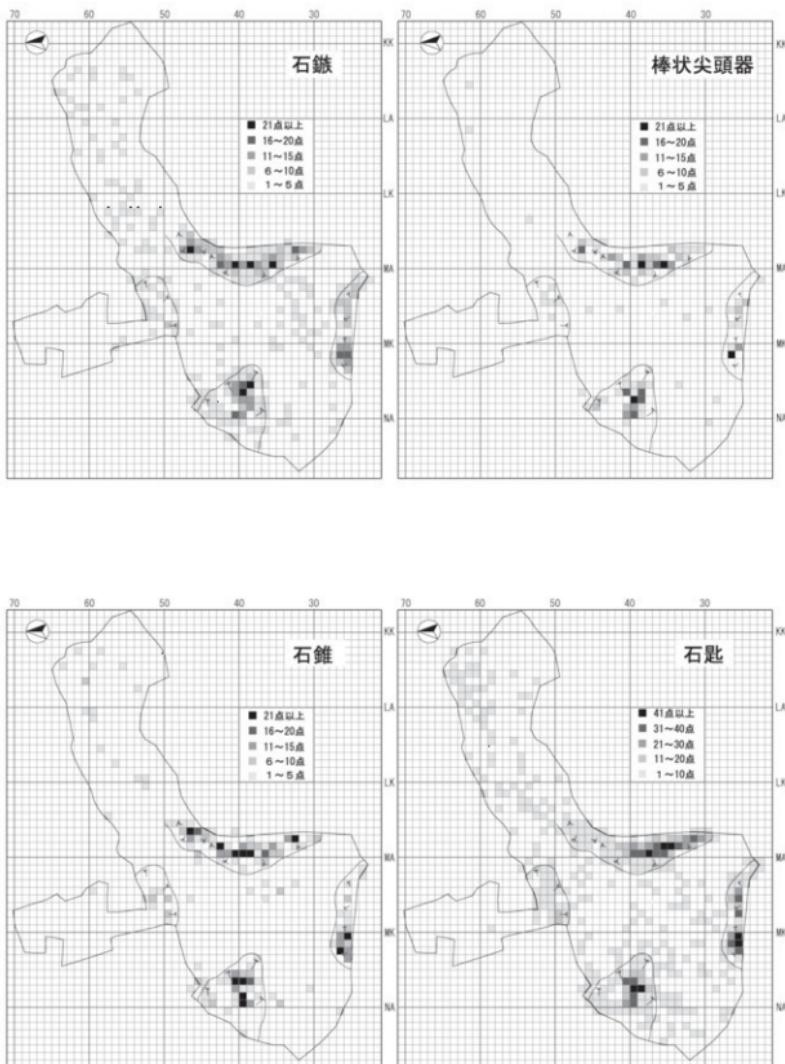
## 石器の分布について(第577・578図)

石器の出土点数は遺跡全体で総数10,000点を超え、それらの多くは捨て場からの出土である。ここでは、石器出土量の平面的な分布から、器種ごとの出土傾向を捉え、その中でも特徴的な様相を示すST202について述べる。

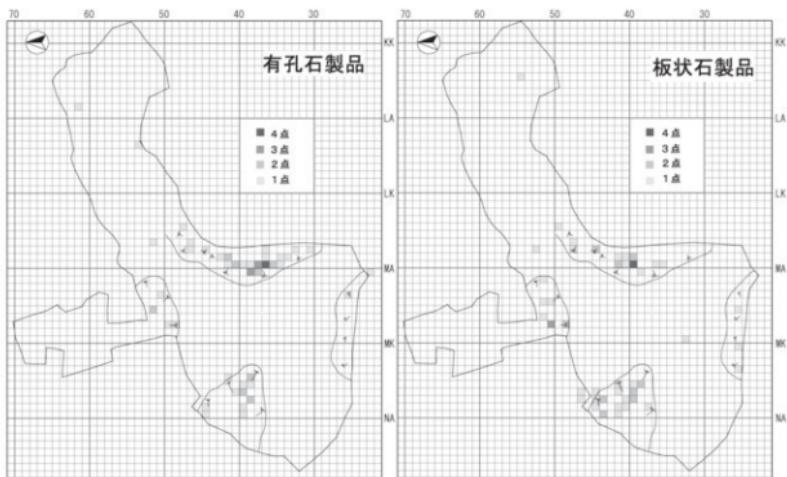
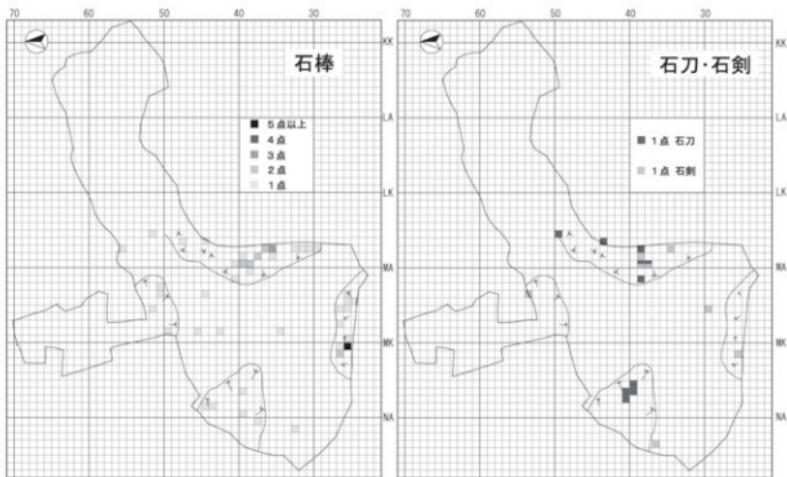
分布図を作成したのは出土点数が比較的多い剥片石器4器種(石鎌・棒状尖頭器・石錐・石匙)と、石製品5器種(石棒・石刀・石剣・有孔石製品・板状石製品)である。出土量が多いグリッドは濃い色で、少ないグリッドは薄い色で図示した。

器種ごとの傾向を見ると、剥片石器のうち石鎌・棒状尖頭器・石錐はほぼ同様の傾向を示す。ST01・101・202・311でまとまって出土し、ST404では出土量が少ない。石匙はST01・101・202でまとまって出土し、ST311・404では出土量が少ない。ST202は捨て場規模が小さいにもかかわらず、規模の大きいST01とST101に匹敵する量の石匙が出土している。石製品のうち有孔石製品・板状石製品・石刀は、規模の大きいST01とST101でまとまった出土傾向を示す。そのうち有孔石製品・板状石製品についてはST202での出土量が極端に少ない。一方、石棒はST202で集中して出土しており、特徴的な傾向を示す。石剣はST101・202・404で出土し、ST01とST311では出土していない。

総体的にみると、いずれの器種も規模の大きいST01やST101でまとまって分布する傾向が認められるほか、特にST202においては特徴的な出土傾向を読み取ることができる。ST202は規模が小さいにもかかわらず、剥片石器はST01やST101と同様の分布傾向を示しており、集中して出土する様相が見受けられる。なかでも石匙でその傾向が強い。逆に石製品は極端に少なく、いずれの器種ともほとんど出土していないものの、石棒のみ集中して出土している。これらの特徴的な分布傾向が見られる要因としては、ST202が後期後葉主体の捨て場であることから、後期後葉の石器組成が反映されている可能性と、ST202においては廃棄する器種を選別していた可能性の両者が考えられる。



第577図 石器分布図 1



第578図 石器分布図2

### 土製品について

本遺跡からは総数757点の土製品が出土した。ここでは特に土偶・環状土製品・鐸形土製品について、出土地点別の様相や、異なる地点間で接合した資料の様相などを概観し、若干の考察を加える。

#### 〔土偶〕

##### 出土地点別の様相

まず、立体の土偶について、出土地点ごとの傾向を見ていく。なお、捨て場間で接合した個体はそれぞれの捨て場に1点として計上している。

ST01からは35点が出土した。土偶の全出土数に対するST01の出土数は、他の土製品と比較して多い。特に屈折像の出土比率が高く、35点中6点が屈折像である。遺跡全体では13点出土しており、約半数がST01からの出土である。そのうちの3点(322-1-(1)ほか・328-5・341-1)は高さ30cm前後の大形の土偶である。また、立像でも30cmを超えるものが1点(317-12)あり、大形の土偶は合わせて4点、遺跡全体の出土数7点に対して半数以上がST01から出土している。これらのことから、屈折像及び大形の土偶の出土比率が高いことがST01の特徴といえる。

ST101からは46点が出土しており、出土点数は最も多い。捨て場間で接合した4点はすべてST101から出土した。屈折像は6点出土しており、そのうち3点は小形(10cm未満)である。立像でも小形が8点出土しており、合わせて小形は11点である。中形(10~30cm前後)は11点、大形は3点であり、ST01とは対照的に小形・中形の土偶が多いことがST101の特徴といえる。

ST202からは6点、ST311からは7点が出土した。ST202は土製品の出土数が極端に少ないが、土偶は一定数が出土している。どちらの捨て場も土偶の残存状態が悪く、ほとんどが単独部位である。

ST404からは21点が出土した。ほとんどが単独部位である。頭部が5点、足部が6点、胸・腹部が6点であり、それぞれの部位が一定数出土している。ただし腕部は3点であり、他の部位に比べ若干少ない。捨て場単位の土偶出土総数に対する各部位の出土比率は、頭部・足部・胸・腹部の3部位については他の捨て場と比較して最も高い。このことから、特定部位の出土比率が高いことがST404の特徴といえる。

遺構外からは19点が出土した。そのうち10点はST01に連続する北側の斜面からの出土である。他の9点は遺跡全域から散発的に出土している。

遺構内からは胸部片が3遺構(SK144・352、SKP6409)から出土している。いずれも比較的の残存状態は良いが、出土状況が明確ではないため、意図的に埋納されたものか否かは定かではない。

以上、各出土地点ごとに土偶の出土傾向を検討した。なお、土偶は全体的に残存状態が悪いため、大きさや形態の分類は、推定が可能な個体のみで行った。推定可能な個体は半数に満たないことから、上記の傾向と実態とは差異がある可能性もある。

#### 遺構・捨て場間接合

土偶は4点が遺構間で接合した。

403-8は頭～左足部が残存する立像の土偶である。頭～胸部はST101(LS39 147層・191層)、腹～右足部はST101(LT39 136層)、左足部はST311(LQ46 1層)から出土した。頭～胸部と腹～右足部の接合部にはアスファルト状の付着物が認められることから、破損後修復されたものと考えられる。この2つの破片は隣接するグリッドから出土していることから、廃棄時には接合していたものが、廃棄の衝

撃もしくは廃棄後の土圧などにより破損した可能性が推測される。左足部は頭～右足部から約30m離れた箇所で出土した。1層からの出土であることから、元位置を保っていない可能性もあるが、廃棄時点ですでに破損していたものが、別単位で廃棄された可能性も考えられる。

404-11は下腹～左足部が残存する立像の土偶である。下腹部上端の破損部にはアスファルト状の付着物が認められることから、破損後に修復されていたものと思われるが、上半身は出土していない。本遺物は3破片が接合している。左足部はST101(LS41 186層)、右下腹部はST101(LS41 155層)、左下腹部はST01(MS42 9層)からの出土である。破損状況から上半身と左足部が先に破損し、その後下腹部が縦方向に破損したものと復元できる。なお、下腹部の破損箇所は粘土接合部ではない。左足部と右下腹部が出土した箇所と左下腹部が出土した箇所は直線距離で約80m離れた、平坦面を挟んだ東西の捨て場であることから、これらは別単位で廃棄されたものと考えられる。

412-7は屈折像の右足部である。膝下部分はST01に隣接する斜面(MR45)、腿部分はST101(LT38 205層)から出土した。直線距離で約80m離れた、平坦面を挟んだ東西の斜面から出土したことから、別単位で廃棄されたものと考えられる。

422-14は首～足部が残存する立像の土偶である。胸～足部は4破片が接合している。これらの破片はグリッド・層位は異なるが、すべてST101から出土した。別単位で廃棄された可能性も否定できないが、ST101は斜面堆積であることから、廃棄単位は同じだったものの、廃棄時の衝撃やその後の流出などにより散逸した可能性が高い。首部はST404(MG51 I層)から出土した。胸～足部と首部の出土地点は直線距離で40m以上離れた、平坦面を挟んだ北側と東側の捨て場であることから、別単位で廃棄されたものと推定される。

以上4点の接合状況から、同一個体においても、部位により廃棄単位が異なるもののが存在することがわかる。その原因として、廃棄の時期が異なる可能性と、意図的に廃棄箇所を分けた可能性とが考えられる。前者の場合、部分的に破損した後も土偶を使用し続け、結果として別の場所に廃棄されたものと考えられる。一方後者の場合は、破損も含め積極的な意図が働いていた可能性が高い。404-11の例は、粘土接合部でない箇所で破損し、それぞれの破片が異なる捨て場から出土した。破損の方向は不自然であり、意図的に破壊された可能性が考えられる。また、破損部に磨滅痕が認められないことから、両破片とも破損後まもなく廃棄されたものと考えられる。これらのことから、404-11は積極的な意図のもと、破壊・廃棄行為が行われた可能性が高いと言える。また、他の3例についても、破損部分に磨滅痕が認められないことから、接合破片は破損後まもなく廃棄されたものと推定できる。破損が意図的なものか否かは定かではないが、破損から廃棄まで時間差がないとすれば、少なくとも廃棄については、何らかの意図のもと廃棄場所が分けられた可能性が示唆される。

本遺跡は後世の大きな削平を免れており、また調査は全面発掘であったにもかかわらず、完形に復元できる土偶は出土していない。土偶が廃棄されてからの約3,000年の間に、何らかの要因で遺跡外に移動したり、粉々に破損した可能性も考えられるが、すべてがそのような状況であるとは考えがたい。このことから、破損した土偶の一部を意図的に遺跡外に持ち出すこともあったものと推測される。なお、破損後の使用については、破損部が磨滅している個体が極めて少ないとから、持ち運んだり、触れるなどの積極的な使用はなかったと推定される。

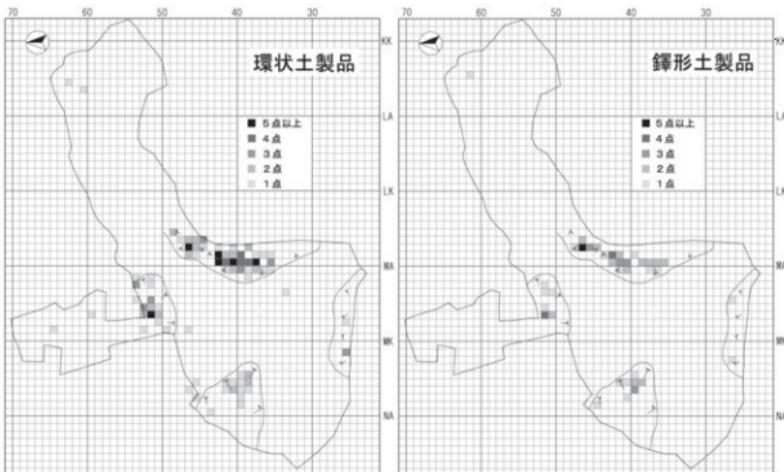
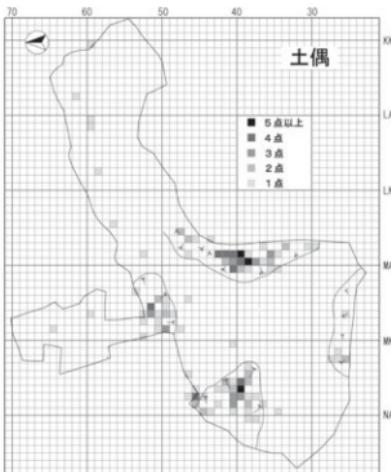
## 〔環状土製品〕

## 出土地点別の様相

地點別出土点数はST01が10点、ST101が46点、ST202が4点、ST311が12点、ST404が21点、遺構外が5点である。捨て場の規模が比較的小さいST311とST404の出土点数が、捨て場の規模では両者よりも大きいST01を上回ることが特徴としてあげられる。ST311及びST404は後期前葉(IV 2~3期)を主体とする捨て場であることから、該期に特徴的に認められる環状土製品が相対的に多く廃棄されたものと考えられる。

## 遺構間・捨て場間接合

環状土製品は15点が遺構間・捨て場間で接合した。各捨て場は微高地周囲の斜面に形成されており、廃棄後の遺物が自然に捨て場間を移動するとは考えがたい。また、破損部に磨滅痕が認められないことから、破損から廃棄までは極端な時間差はなかったものと考えられる。以上のことから、廃棄にあたっては、意図的に廃棄場所が分けられた可能性が考えられる。なお、環状土製品は器壁が厚いことから、廃棄後に破損する可能性は低いと考えられるものの、遺構間・捨て場間で接合したものも含め、細かく破



第579図 土製品分布図

損しているものが過半数を占める。このことから、使用時に細かく破損するような衝撃が加えられたか、または廃棄時に意図的に破壊された可能性が考えられる。

#### [鐸形土製品]

##### 破損状況

鐸形土製品は小形であることから、完形で出土する比率が高いにもかかわらず、端部の一部が不自然に破損する例を15例確認した。内面に付着する煤状の黒色付着物が破損部には認められないことから、使用後に破損したものと思われる。破損部位が不自然であり、廃棄後に破損したとは考えがたいことから、廃棄に際して意図的に破壊した可能性も推測される。

##### 環状土製品と鐸形土製品の関連性

環状土製品と鐸形土製品は、文様要素からIV 2期(後期前葉)に限定的に作られたものと考えられる。両者には、縦位の隆線が施されるなど、器形や文様に関連性が窺われる。しかしその一方で、環状土製品に多用される連続する波状文が鐸形土製品には見られないことや、鐸形土製品に一定量見られる沈線間の刺突列が環状土製品には施されないなど、差異も認められる。

ST311においての出土状況をみると、環状土製品は2層から5点出土しており、3層からは出土していない。一方、鐸形土製品は2層からは出土しておらず、3層から9点出土している。このことから、鐸形土製品が環状土製品よりも、より古い段階に用いられたものと考えられる。また、両者の盛衰は連動することから、何らかの関連性が示唆される。

#### 漆液容器について

本遺跡からは漆液容器、アスファルト容器、漆液とアスファルトが混入する容器が合わせて122点出土した(第4-21表)。特に漆液容器(漆液とアスファルト混入容器を含む)は出土点数が多く、破片資料も含めて約80点を数える。漆液は、塗料として使用するために数段階の工程を踏む。木から樹液を探る「採取」、漆液を保存する「貯蔵」、漆液の水分を減らす「くろめ」、漆液を均一に攪拌する「なやし」、赤や黒などの色をつける「顔料の混合」などがあり、出土した漆液容器もこれらの工程のいずれかで使用されたものと考えられる。これを念頭に、ここでは漆液容器の各要素における傾向・特徴を捉え、その機能や使用状況などについて若干の検討を加える。

漆液容器に使用された土器のうち時期が明らかなるものは、IV 2期(後期前葉)11点、IV 3期(後期前葉～中葉)2点、IV 4期(後期中葉)5点、IV 5期(後期中葉)3点、IV 6期(後期後葉)4点、IV 7期(後期後葉)1点である。時期ごとの出土比率は、出土土器全体における時期別出土量比率と概ね同様の傾向を示す。このことから、特定の時期に限定的に作業が行われたのではなく、後期を通じて、継続的に漆液が使用されていた状況が窺われる。

出土地点ごとの点数は、ST01が8点、ST101が55点、ST202が3点、ST311が1点、ST404が9点、遺構外が4点である。捨て場ごとの出土比率はST101が最も高く、また、土器全体の出土量の比率と比較しても、その出土量は顕著である。なお、ST404も比較的比率が高い。ST101では103層で4点、201層で4点、4層で3点が同一層から出土しており、他の層ではそれぞれ2点以下である。<sup>(註17)</sup>他の捨て場については分層された層の有する時期幅が広いことから、単純に層ごとの数量比較はできない。しかし、出土点数が多いST101の傾向を見る限り、基本的には小規模な作業が継続的に行われて

いたものと推定される。

器種は深鉢・壺などがある。土器全体の器種組成では深鉢が多数を占めるのに対し、漆液容器では深鉢20点、壺29点と壺の出土比率が高い。壺を貯蔵容器と想定するならば、縄文時代でも漆液は採取後すぐに使用するのではなく、一定期間貯蔵される場合があったものと推定される。壺の比率が高いのは、貯蔵のために意図的に壺が選択された結果と考えられる。一方、深鉢など口縁部(口縁部が欠損しているものは上端)が開く器形のものは、貯蔵以外の用途に使用されたと推定される。なお、壺であっても404-9のように胴部最大径付近で欠損するものがあることから、必ずしも貯蔵用のみでなく、深鉢と同様の用途に用いられたものもあると考えられる。

器種にかかわらず口縁部が欠損しているものが多いことも特徴的である。壺には打ち欠き痕が確認できるもの(422-8、425-22、406-11)もある。前述の通り、壺は貯蔵容器として用いられた可能性があることから、この打ち欠き痕は漆液を取り出す際に、打ち割られた痕跡と推測される。そのように仮定すると、貯蔵時には乾燥や不純物の混入を防ぐため、粘土など着脱の難しいもので封がされていたと考えられよう。壺以外にも口縁部が欠損しているものが多数認められるが、これらは上端の欠損部にも漆が付着する例が多いことから、欠損した状態で使用されたものと考えられる。破損した土器を再利用した可能性が考えられるが、上端が水平に欠損している例が10例(306-5、382-12、398-15、404-9、413-7、422-13、435-12、501-11、504-5、512-10)であることから、これらは、再利用する際に機能にあわせて意図的に整形された可能性も考えられる。また、379-23は台付土器の台部のみを再利用し、逆さにして台部内面を使用している。高さが3cm程度と低く、薄い膜状に付着することから、パレットとして使用された可能性が考えられる。なお、498-8も土器破片の内面に薄く不整円形に付着することから、同じくパレットとして使用された可能性が高い。

外面に液だれが認められるものは15例存在する。貯蔵用と考えられる壺や注口は5例(422-8、425-22、388-4、391-8、406-11)あり、貯蔵していた漆を流し出した際に液だれが生じたものと考えられる。一方、貯蔵用以外の器種でも9例(370-9、376-7、379-18、379-21、382-11、398-15、422-10、422-13、504-5)に液だれが確認できる。このことから、貯蔵用の容器から作業用の容器に移し替えるだけでなく、工程にあわせて、何度か容器を代えていたものと想定される。なお、370-9、422-10、398-15、406-11、504-5では土器を傾けた状態で漆膜が付着し、対応する外面に液だれが認められることから、漆液を流し出した方向が復元できる。また、404-9は上端全周に漆が付着し、外面にもほぼ全周に液だれ状の付着が認められる。この付着が、漆液採取時に漆液を搔き取った工具を上端にこすりつけた痕跡とすれば、本土器は採取容器である可能性も考えられるが、判然としない。

付着している漆膜はそれぞれ厚みが異なり、概ね1mm以下(全体に薄い膜状)、1~3mm程度(薄い膜状~部分的に3mm以下の小塊状縮皺)、3~10mm程度(塊状縮皺)に分けられる。1mm以下のものは35例(376-7、412-6など)ある。漆液を丁寧に搔き取ったものか、「くろめ」や「なやし」が行われ比較的なめらかな状態であったものと推定される。なお、漆液を搔き取った痕跡が明確に認められるものは見受けられなかった。3~10mm程度の比較的厚く付着しているものは作業途中で放棄された可能性が考えられる。また壺の場合は、貯蔵中に乾燥が進み粘性が強くなってしまったものと推測される。特に425-22は、外面にも厚く液だれが付着していることから、貯蔵中に粘性が強くなった漆液を取り出して使用しようとした様子が窺える。

赤色顔料が付着している例は6例(319-15、382-14、403-6、504-5、504-16、未掲載1点)認められる。漆膜は暗褐色～褐色を呈し、赤色に発色している例はないものの、これらは赤漆を作るために赤色顔料を混ぜた容器と考えられる。

また、科学分析の結果、漆液とアスファルトが混入する容器が13点(370-9、379-16、379-18、379-20、379-21、379-23、398-16、382-11、422-12、465-17、512-10、512-11、未掲載1点)確認された。これらについては、容器を転用した可能性と、漆液とアスファルトを意図的に混ぜて使用していた可能性が考えられる。本遺跡はアスファルトの産地として知られる秋田県能代市駒形や秋田県潟上市豊川から直線距離で50km程度であり、比較的アスファルト入手しやすい環境にある。このことから、仮に意図的に漆液とアスファルトを混ぜて使用していたとすれば、黒漆を作るための顔料としてアスファルトが用いられていた可能性も示唆される。

本遺跡では漆液容器以外にも漆製品製作工程遺物として、赤漆を作るための顔料であるベンガラ塊やベンガラ容器などが出土しており、また漆塗り製品としては、赤漆塗りの糸玉10点、編組製品2点のほか、赤色塗彩が施された土器や土製品が多数出土している。漆液容器・赤色塗彩土器とも、後期前葉から後葉までの各時期の資料が認められることから、本遺跡では後期を通じて、漆製品を製作・使用していたものと考えられる。

#### 縄文時代後期前葉～後葉の漆下遺跡の性格

本遺跡では後期前葉から後葉にかけて、特に多数の遺構が構築される。環状構造を呈する掘立柱建物群や、多数の配石土坑・配石遺構が構築され、捨て場からは土製品や石製品など祭祀に関連すると思われる遺物が多量に出土していることなどから、祭祀に特化した空間であると復元することも可能である。しかし、本遺跡を祭祀遺跡と解釈した場合、祭祀を執り行った人々の居住域をどこに求めるかが問題となる。小又川流域は森吉山ダム建設事業に伴い、ダム用地内をほぼ全面的に発掘しており、全域の様相が概ね明らかとなっているにもかかわらず、後期前葉から中葉の堅穴住居跡の検出例は5軒にすぎない。ダム用地外から祭祀のたびに本遺跡を訪れている可能性も否定できないが、ダム用地内には居住可能な平坦面が多数存在し、また、前時期まで居住していたことを勘案すれば、不自然な感が否めない。

以上のことから、本遺跡内が居住域として機能していた可能性を指摘しておきたい。本遺跡で検出された後期前葉～後葉の堅穴住居跡は13軒のみだが、掘立柱建物跡は100棟を超える。前述したように、高位面は上位層が一定程度消失している可能性があり、この掘立柱建物跡に堅穴や焼土面が伴っていた可能性は否定できない。この可能性と、捨て場に廃棄された遺物の大半が日常用具である状況を積極的に評価すれば、本遺跡は墓域・祭祀域を伴う居住域と捉えることができ、大規模集落と推定することが可能である。ただし、掘立柱建物跡を堅穴住居跡の痕跡とする解釈は推測の域を出ず、捨て場に廃棄された日常用具も、すべて祭祀行為のために遺跡外から持ち込まれたものと解釈すれば、本遺跡を祭祀遺跡と判断することも可能である。しかし、単純に祭祀遺跡と結論づけるのではなく、居住域・墓域・祭祀域などを包含した複合的な性格を持つ大規模集落であった可能性もありうることを指摘しておきたい。<sup>(註3)</sup>

### 森吉山ダム用地内遺跡群における位置付け

本遺跡が位置する小又川流域では、森吉山ダム建設事業に伴い平成7～19年度にかけて51遺跡の発掘調査を行った。本遺跡の機能時期である縄文時代早期・中期前葉～中葉・中期後葉・後期初頭・後期前葉～後葉・中世の時期ごとに、ダム用地内に位置する同時期の遺跡群について、特に堅穴住居跡の検出状況を中心に概観し、塗下遺跡がダム用地内の遺跡群の中でどのような位置を占めるのか検討を行う。なおダム用地内の遺跡の詳細や住居跡の検出数は第2章第2節を参照頂きたい。

#### 〔縄文時代早期〕

本遺跡の機能時期として最も古いのは縄文時代早期である。ダム用地内では早期の遺跡は数少なく、遺構は地蔵岱遺跡の堅穴住居跡1軒、森吉B遺跡の土坑1基のみ、遺物は姫ヶ岱C遺跡・桐内A遺跡でも出土しているもののいずれも小片であり、ダム用地内での該期の様相は未だ不明瞭な部分が多い。本遺跡ではほぼ完形に復元可能な早期の土器が2点出土したほか、比較的大形の破片が数点出土しており、これまでダム用地内で確認された遺物のなかでは比較的良好な資料といえる。

#### 〔縄文時代前期〕

本遺跡においては前期中葉に集落が営まれる。同時期のダム用地内では深渡遺跡と地蔵岱遺跡、森吉家ノ前A遺跡で居住域が確認されており、散発的に小規模な集落が営まれていた様子が明らかとなっている。

本遺跡の特徴的な遺構としては、ロングハウス状の大形堅穴住居跡(SII0004・10106)がある。ダム用地内の同時期の堅穴住居跡は、深渡遺跡と地蔵岱遺跡で各6軒が検出されており、そのうち地蔵岱遺跡の2軒は、本遺跡と同様のロングハウス状の大形堅穴住居跡である。大形堅穴住居跡の性格については諸説あるが、現在検出されている住居軒数から推定すれば、ダム用地内では概期の堅穴住居跡の総数が少なく、集落規模は小さいと推定されるにもかかわらず、大形堅穴住居跡が一定数存在することから、公共施設や冬場の集合住宅などの臨時的な建物ではなく、日常的な居住のための建物として使用された可能性も考えられる。

地蔵岱遺跡の大形堅穴住居跡は、段丘の縁辺部に小又川の川筋に平行して構築されており、また同位置で1回の建て替えが行われている。これは本遺跡の大形堅穴住居跡と共通の傾向であり、ダム用地内における大形堅穴住居の特徴を示すものと考えられる。なお、二重鳥B遺跡では後葉の大形堅穴住居跡が同様の立地で構築されていることから、この傾向は前期後葉においても継続するものと考えられる。

以上の通り、縄文時代前期中葉にはダム用地内では小規模な集落が散発的に営まれる。本遺跡も集落規模は小さく、それらと同様の集落の一つであったと推定される。

#### 〔縄文時代中期前葉～中葉〕

ダム用地内では中期前葉から中葉にかけて遺跡数が増加する傾向にあり、堅穴住居跡も同様に増加傾向が認められる。前葉では堅穴住居跡が検出された遺跡は3遺跡で、軒数は合わせて8軒と少ないが、中葉では本遺跡も含め8遺跡で堅穴住居跡が検出されるようになる。ただし、集落規模は小さく、二重鳥C遺跡で12軒検出されているほかは、いずれの遺跡も3軒以下である。

本遺跡では、前葉から中葉にかけての堅穴住居跡が2軒存在するものの、遺構・遺物ともに少ないとから、ごく小規模な集落が単発的に営まれていたと考えられる。ダム用地内に点在する同時期の

遺跡とほぼ同じ様相であり、それらと同様に散発的な集落の一つであったと考えられる。

#### [縄文時代中期後葉]

中期後葉にはさらに遺跡数が増加し、本遺跡も含め19遺跡で堅穴住居跡が検出されている。4軒未満の小規模な集落が多数を占めるが、6～13軒の堅穴住居跡が検出された遺跡も4遺跡あり、前段階に比較して規模の大きい集落が営まれるようになる。この時期の堅穴住居は基本的に複式炉が設けられる。また、集落の規模に関わらず、段丘縁辺部に構築される例が多い。なお、段丘縁辺部に構築される場合は、複式炉が段丘崖側に設けられる。

本遺跡では4軒の堅穴住居跡が検出されている。本遺跡の堅穴住居跡も段丘縁辺部に構築され、複式炉が段丘崖側に設けられる。ダム用地内における該期の堅穴住居跡と同様の形態を示すことから、流域内での何らかの規制に則った小規模な集落が営まれていたものと考えられる。

#### [縄文時代後期初頭]

該期にはダム用地内における堅穴住居跡の検出軒数が最も多くなる。前段階より堅穴住居跡を検出した遺跡数は減少するものの、1遺跡における検出軒数は増加しており、前段階には小規模から中規模程度の集落が数多く点在していたものが、該期には特定の集落に集住する形態に変化した様相が看取される。特に日廻岱B遺跡では、50軒前後の住居が中央の空閑地の周間に巡る環状集落の形態をとる。<sup>(210)</sup> そのほかにも、本遺跡で13軒、二重鳥C遺跡で10軒、桐内D遺跡4軒などの検出例があり、拠点的な大規模集落と、小規模もしくは中規模の衛星的な集落が展開していた様子が窺われる。

なお該期のダム用地内では、集落規模の大小にかかわらず、基本的に堅穴住居の炉として土器埋設炉が多用される。また、該期の堅穴住居の堅穴は、前段階までと比較して浅くなり、地山土まで掘り込みます地山上面を床面とする傾向がある。

#### [縄文時代後期前葉～末葉]

ダム用地内においては、前段階に多数の堅穴住居跡が検出されているにもかかわらず、後期前葉～中葉にかけては住居数が激減し、検出数は5軒のみとなる。そのほか堅穴住居跡以外の遺構として、森吉家ノ前A遺跡で前葉から中葉にかけての土坑墓群が31基検出されているものの、該期の集落様相は不明瞭である。

本遺跡では後期の遺構・遺物が多数検出されており、後期全般を通じて大規模な活動が行われる。なかでも後期前葉の遺物出土量は他の時期よりも多く、活発な活動が行われていたものと推測される。しかし前述した通り、前葉から中葉にかけてはダム用地内の集落様相は不明瞭であり、本遺跡の位置付けは極めて難しい。本遺跡を形成した集団の居住域はダム用地内にはほとんど確認できないことから、用地外から一時的に移動してきている可能性のはかに、本遺跡内に居住していた可能性も視野に入れる必要がある。

後葉においても、本遺跡内では前段階と同様に活発な活動が見られるものの、その性格は変容したと考えられる(第4章第3節5参照)。そして後期末葉になると、本遺跡ではそれまで大規模に展開していた捨て場や遺構群が急激に衰退し、晚期には活動の痕跡が全く確認できなくなる。ダム用地内では後葉に堅穴住居跡の検出件数が増加し、特に本遺跡の南側の段丘に位置する二重鳥遺跡群において小～中規模の集落が群在するようになる。二重鳥B遺跡では本遺跡のIV 7～8期にあたる捨て場が形成されているが、同遺跡内に堅穴住居跡が1軒しか認められないことから、居住域と遺物廃棄域が分

離していた可能性が指摘されている。晚期には、本遺跡の対岸に位置する向様田A・D遺跡において大規模な祭祀遺跡が営まれるが、同時期の居住域はダム用地内にはほとんど認められない。

以上のように、ダム用地内では後期後葉から末葉にかけて、大規模かつ継続的に機能した本遺跡の衰退に連動して、二重鳥遺跡群のような小～中規模の集落が営まれるようになる。その後、晚期になると大規模な遺物廃棄城(祭祀城)が営まれるもの、それに相当するような居住域は確認できなくなることから、居住域と遺物廃棄城(祭祀城)が完全に分離する様相が看取できる。<sup>(註20)</sup>

#### [中世以降]

ダム用地内では、地蔵岱遺跡・森吉家ノ前A遺跡で中世の大規模集落が営まれる。これらの集落は16世紀代に廃絶しており、その後の様相は不明瞭である。

本遺跡で検出された該期の集落は、16世紀末～17世紀にかけて機能したものと推定され、地蔵岱遺跡や森吉家ノ前A遺跡が廃絶したのちに展開した集落と考えられる。集落規模が前段階と比較して小さいことから、16世紀代に大規模集落が廃絶したのちは、小規模な集落が点在したものと考えられ、本遺跡もその一つであったものと推定される。

該期の特徴的な遺構として炉跡(SN104など)がある。同様の炉跡は深渡遺跡・向様田E遺跡・桐内A遺跡などで確認されていたが、その性格は不明であった。しかし本遺跡の炉跡は、周囲から鉄が付着した坩堝(297-31)や羽口・鉄滓が出土しており、鉄製品生産に関連した炉跡であったと考えられる。このことから、これまで性格が不明であったダム用地内の同様の炉跡も、鉄製品生産に関連する炉跡であった可能性が高い。ダム用地内にはこのような炉跡が点在することから、該期においては、小規模な鉄製品生産が各所で行われていたものと推定される。

註1 炉を屋外炉ではなく屋内炉と判断した基準は第4章第2節に記載した。

註2 土坑墓の推定基準は第4章第2節に記載した。

註3 第62～67表の詳細内容は第70～75表(CD収録)に収録した。

註4 秋田県教育委員会「深渡遺跡・森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVI-」秋田県文化財調査報告書第407集 2006(平成18)年 p.47-50,224-226

註5 秋田県教育委員会「深渡A遺跡・森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVII-」秋田県文化財調査報告書第408集 2006(平成18)年 p.20-21

註6 I群 b種は盛岡市薬師社脇遺跡II群土器に類例が求められる。

宮城開発株式会社 盛岡市教育委員会「薬師社脇遺跡～宅地造成に伴う緊急発掘調査報告書-」2008(平成20)年

註7 秋田県教育委員会「深渡遺跡・森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書XVIII-」秋田県文化財調査報告書第407集 2006(平成18)年 p.74-75

註8 文献註4・7と同じ

註9 北秋田市教育委員会「二重鳥B遺跡～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書-」2009(平成21)年

註10 磯崎正彦「縄文式土器・各論IV」後期の土器」「日本原始美術 第1巻 縄文式土器」講談社 1964(昭和39)年

今井富士雄・磯崎正彦「十腰内遺跡」「岩木山～岩木山麓古代遺跡発掘調査報告書-」弘前市教育委員会

1968(昭和43)年

註11 小林圭一「瘤付土器」「縄文土器」「小林圭一編『縄文土器』刊行委員会 2008(平成20)年

註12 十腰内編年は関根達人氏によりⅢ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵ群土器の内容について問題が提起されている。後期後葉の土器群(十腰内Ⅳ・V・VI群)については十腰内編年ではなく、小林圭一氏の瘤付土器編年を用いたが、後期前～中葉については現在のこと

- ろ十腰内Ⅰ～Ⅲ群に変わる型式名が定着していないため、これと対比することとした。
- 関根達人「十腰内Ⅲ・Ⅳ・V・VI群土器」に関する今日的理解」「葛西勲先生還暦記念論文集 北奥の考古学」葛西勲先生還暦記念論文集刊行会 2005(平成17)年
- 註13 秋田県教育委員会「日廻岱B遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XV-」秋田県文化財調査報告書第394集 2006(平成18)年
- 註14 北秋田市教育委員会「平成13年度 埋蔵文化財発掘調査報告書～森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査～二重鳥C・G遺跡」2003(平成15)年
- 註15 秋田県教育委員会「桐内B道路・桐内D道路－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 V-」秋田県文化財調査報告書第318集 2001(平成13)年
- 註16 北東北における後期初頭の土器は、地域ごとに様相が多様であるため未だ定着した型式名がなく、前十腰内式土器などと呼ばれる。本遺跡周辺の様相については日廻岱B遺跡発掘調査報告書や、榎本剛治氏などにより検討されている。
- 秋田県教育委員会「日廻岱B遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XV-」秋田県文化財調査報告書第394集 2006(平成17)年 p.311-313
- 榎本剛治「秋田県における湯舟沢A式土器の検討」「葛西勲先生還暦記念論文集 北奥の考古学」葛西勲先生還暦記念論文集刊行会 2005(平成17)年
- 註17 ST101の2層や286層などからまとまって出土しているが、再堆積層のため除外した。
- 註18 本遺跡の対岸に位置する向様田D遺跡では、晩期の盛土が検出されている。その性格について、廃棄域を伴う集落遺跡である白坂遺跡と、石器組成を対比させて推論を試みている。向様田D遺跡では石器の出土点数が凹石類や石皿類の出土点数を大きく上回る傾向があり、凹石類や石皿類の出土点数が石器の出土点数よりも多い白坂遺跡とは明らかに様相が異なる。白坂遺跡の出土石器は居住活動に関わって廃棄されたものとされており、白坂遺跡と対照的な傾向を持つ向様田D遺跡は、居住活動ではなく儀礼的行為などに関わって遺跡外から持ち込まれた可能性が指摘されている。これと同じ視点に立てば、本遺跡では凹石類や石皿類が石器を上回り、比較的白坂遺跡に近い様相といえる。また、石器全体(※二次加工のある剥片を除く)における石製品の出土比率を見ると、白坂遺跡では石製品の占める割合が石器全体の約2%であるのに対し、向様田D遺跡では約9%を占める。本遺跡においては約3%であり、これも白坂遺跡に近い傾向を示す。以上のように、本遺跡の石器組成は祭祀域と推定されている向様田D遺跡より、居住域を含む集落とされる白坂遺跡に近い様相を示しており、これは本遺跡が居住城を含む集落であった可能性を示す傍証となり得るといえよう。
- 秋田県教育委員会「向様田D遺跡(第2次)－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XXI-」秋田県文化財調査報告書第452集 2010(平成22)年
- 秋田県教育委員会「白坂遺跡発掘調査報告書－県営圃場整備事業に係る埋蔵文化財発掘調査－」秋田県文化財調査報告書第244集 1994(平成6)年
- 註19 二重鳥C遺跡や桐内D遺跡などでは後期初頭の土器埋設炉が確認されている。堅穴が検出されていないことから、堅穴住居跡とは認定されていないが、本遺跡と同様に地山上面に構築されており、後世の削平などにより堅穴が消失した可能性が高いと推定されることから、ここでは堅穴住居跡として扱うこととした。
- 註20 北秋田市教育委員会「二重鳥B遺跡－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査－」北秋田市埋蔵文化財調査報告書第11集 2009(平成21)年 p.228
- 註21 秋田県教育委員会「向様田D遺跡(第2次)－森吉山ダム建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 XXI-」秋田県文化財調査報告書第452集 2010(平成22)年 p.200

第62表 ST01捨て場有文土器片出土量

第62表 ST01捨て場有文土器片出土量2

部位	Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ		Ⅷ		Ⅸ		中型		大型		其他		不明		粗量	
	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数
128	16	12340	—	—	130	100	—	100	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	20
129	17	2000	20	254	—	—	—	—	1	60	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	280
140	21	280	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	230
141	21	88	—	—	3	30	1	12	—	—	1	20	—	—	26	—	—	—	—	—	—	—	2	230
150	2	1545	—	—	98	1190	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	6	52
その他	1	26	17	398	1	12	343	10850	201	7129	65	1602	20	1803	20	65	2	19	3	112	2	90	21	17727
-48	1	12	54	2671	1	35	526	13389	380	12135	231	7341	198	7698	113	2298	21	603	10	271	15	210	152	958
総計	1	128	438	25303	19	361	4096	2871	1836	181261	1699	43241	281	32589	1083	34923	621	15621	45	1321	141	2275	20	1200

第63表 ST101捨て場有文土器片出土量1

部位	Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ		Ⅷ		Ⅸ		中型		大型		其他		不明		粗量	
	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数
1	17	566	231	11561	1	92	2,843	44,136	997	20,172	580	18,866	196	6,298	152	2,762	96	1,652	18	9,208	—	—	1,969	15,39
2	9	81	81	3,723	21	214	2,569	50,112	771	18,820	625	21,515	281	11,694	253	5,436	121	3,801	61	19	377	—	2,221	
4	3	107	—	—	56	1,271	—	—	27	2,965	58	3,926	31	767	18	2,723	1	20	3	79	8	129	241	2734
5	2	98	—	—	46	954	26	559	20	26,584	26	1,966	6	105	2	51	—	—	85	868	29	607	1	29
6	—	—	—	—	6	98	12	258	21	52	7	279	31	96	6	64	—	—	1	19	—	—	9	315
10	—	—	—	—	1	11	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
11	—	—	—	—	3	38	—	29	1	9	1	35	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1
14	—	—	—	—	3	38	—	11	29	4	193	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	19	1,26
15	—	—	—	—	3	28	8	112	14	906	4	411	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	26	289
18	10	237	—	—	63	1,233	81	1,762	73	2,211	80	1,280	11	6	—	—	—	—	—	—	—	—	115	1,308
19	2	38	—	—	68	796	26	391	43	985	6	246	3	16	—	—	—	—	—	—	—	—	91	1,521
20	—	—	—	—	1	58	—	2	20	1	31	2	15	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	15
22	—	—	—	—	1	38	15	62	2	20	2	19	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	87	745
23	—	—	—	—	2	18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	6
24	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	11
28	—	—	—	—	1	8	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2
29	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	31
31	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	30
33	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	19
34	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	12
35	1	22	—	—	30	225	20	440	21	410	7	332	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	37	395
39	—	—	—	—	3	25	1	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	52
41	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	3
43	—	—	—	—	3	43	0	38	5	128	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	10	88
44	2	52	—	—	26	419	32	1,130	39	230	32	656	—	—	1	24	—	—	—	—	—	—	92	719
45	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0	
46	2	255	—	—	63	620	—	1,174	41	3,040	41	207	30	30	—	—	—	—	—	—	—	—	67	671
47	2	200	—	—	65	1,032	30	1,075	57	5,956	6	114	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	51	610
48	3	65	9	146	5	177	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	13	128
49	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	16
50	1	36	1	3	5	110	9	798	1	53	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	96
53	—	—	—	—	3	25	1	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	52
54	2	58	—	—	6	610	10	391	9	327	2	27	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	22	242
55	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	27
56	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	11
64	1	12	—	—	10	41	28	52	32	128	1	28	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	26
65	1	55	—	—	30	500	58	1,987	41	2,004	39	650	1	14	—	—	—	—	—	—	—	—	83	1,534
66	2	49	—	—	3	35	26	810	12	1,094	1	29	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	50	396
69	2	12	—	—	5	180	2	22	3	1,29	1	9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4	87
70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	98
71	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	77
72	1	8	—	—	7	71	21	106	17	412	1	70	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16	220
73	—	—	—	—	6	5,500	71	2,126	62	6,625	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	1,025	
75	—	—	—	—	6	160	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1	8
76	—	—	—	—	1	55	1	22	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	27
77	—	—	—	—	1	13	0	34	6	280	1	30	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	16	154
78	—	—	—	—	1	19	2	14	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	3	32
80	—	—	—	—	1	18	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	11	49
85	—	—	—	—	1	7	7	7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	47
86	—	—	—	—	1	31	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	7	90
89	—	—	—	—	1	12	2	2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	2	32
92	1	11	—	—	1	18	20	1,490	10	644	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	20	269
93	—	—	—	—	1	14	—	—	—	—	—</td													

第63表 ST101捨て場有文土器片出土量2

第63表 ST101捨て場有文土器片出土量 3

第64表 ST202捨て場有文土器片出土量

部位	Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ		Ⅷ		Ⅸ		Ⅹ		Ⅺ		Ⅻ													
	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]												
1	2	23	33	175	209	22.8	152	6,116	303	6,699	201	6,656	369	7,131	279	3915	25	1,041	11,663	3,525	96,610											
2	11	20	10	81	81	1.0	10	1.0	10	1.0	10	1.0	10	1.0	10	1.0	10	1.0	10	1.0	10											
3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											
4-3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											
4	14	200	-	-	51	718	84	1,090	75	1,332	38	1,900	54	698	17	354	161	1,510	691	7,291												
7	5	53	53	63	63	6.0	29	1,142	81	2,066	27	569	71	210	1	81	196	1,287	401	6,610												
8	3	10	-	-	30	314	68	867	41	1,436	21	689	36	230	5	67	65	563	226	3,212												
9	3	58	58	59	59	19	450	52	856	36	1,233	23	1,211	2	96	2	7	7	859	297	3,756											
10	2	27	-	-	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1											
11	20	55	1,666	11	46	163	2,286	313	6,011	291	7,579	24	5,079	288	3,610	25	4,031	10	300	1	24	142	243	966	7,011	2,443	60,513					
12	5	110	95	94	94	10	156	12	455	12	965	16	220	16	200	50	652	126	2,982													
13	12	280	-	-	37	611	82	1,238	78	1,062	69	1,529	19	308	15	199	1	81	131	1,082	628	7,713										
14	1	26	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	68	2	91											
遺土	1	21	-	-	21	243	41	500	26	1,09	30	990	62	662	46	99	1	19	1	36	181	1,259	308	1,181								
不明	1	7	3	7	9	66	13	371	12	1,803	12	298	27	183	3	13	32	223	100	3,038												
総計	6	52	178	5,533	11	81	2,783	9,028	1,280	21,610	1,093	27,319	272	20,279	1,083	15,279	622	10,279	11	319	1	21	32	1,256	3,684	30,751	9,869	142,960				

第65表 ST311捨て場有文土器片出土量

部位	Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ		Ⅷ		Ⅸ		Ⅹ		Ⅺ		Ⅻ		不明					
	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]				
1	180	32	309	2	309	2,225	57,430	255	1,051	3	13	6	95	7	100	1	6	90	305	235	6,706					
2	33	9	78	-	1,276	11,477	93	2,514	7	150	2	30	-	-	65	373	1,450	31,006								
3	9	180	11	202	1,432	55,08	41	1,300	-	-	1	15	1	12	8	86	1,509	32,299								
4	4	83	14	1,877	11	91	579	23,07	12	290	-	-	-	-	6	68	610	2,710								
5	1	21	4	46	-	-	21	860	1	8	-	-	-	-	1	8	81	1,250								
6	1	27	1	28	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	8	81	1,250								
7	1	1	1	28	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	1	1	1	1	1	1	1					
不明	1	10	2	21	71	2,417	23	572	2	277	2	41	1	15	10	20	200	110	3,223							
総計	16	354	60	3,095	17	295	5,653	180,182	366	8,831	12	130	11	162	8	119	2	30	152	1,310	6,300	19,710				

第66表 ST404捨て場有文土器片出土量

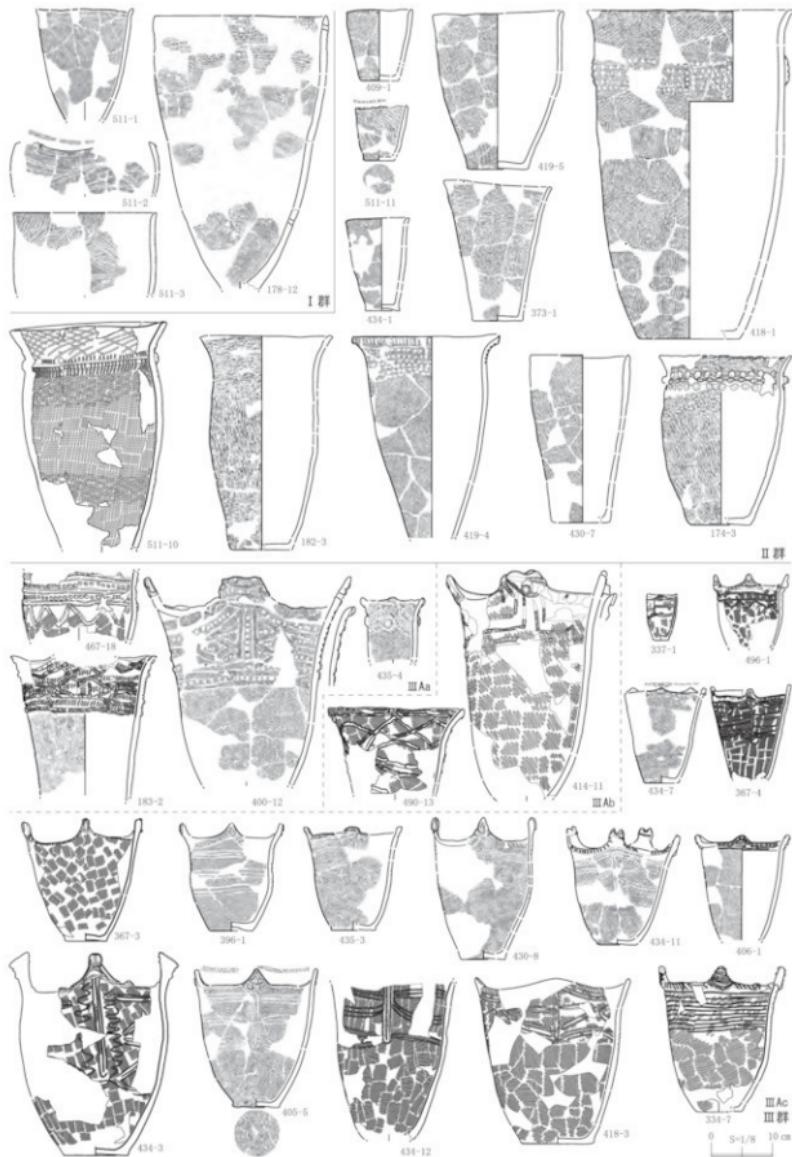
部位	Ⅲ		Ⅳ		Ⅴ		Ⅵ		Ⅶ		Ⅷ		Ⅸ		Ⅹ		Ⅺ		Ⅻ		不明						
	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]	点数	重量 [g]					
1	1	2	22	3,182	2	303	86,736	921	32,820	130	3,037	189	6,859	193	5729	119	3,833	10	173	2,257	17,450	6,990	162,090				
2	15	405	-	-	271	7,108	41	682	21	367	91	1110	105	2,613	27	441	9	97	253	2,124	297	14,991					
3	2	1	22	395	2	66	-	-	1	2	30	1	3,67	6	321	-	-	18	1,189	67	1,021						
4	1	17	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-						
5	0	114	-	-	329	10,927	42	1,070	4	95	11	298	27	361	25	553	1	26	1	101	1,265	653	14,925				
6	1	2	93	3,761	108,021	1,083	319,198	169	3,803	254	8,530	336	9,937	179	1,826	14	28	26	282	22,26	21,181	8,591	186,253				

第68表 石器・石製品分類別出土点数1

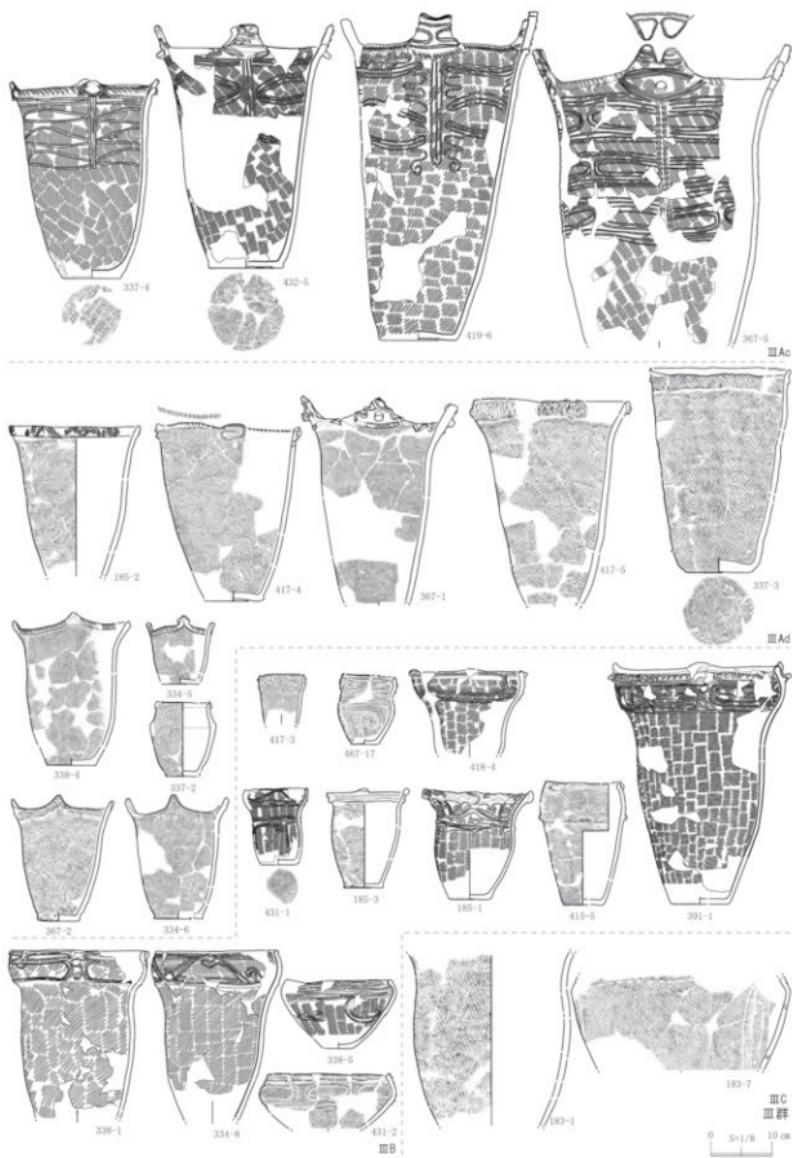
器種	分類	遺構内	ST01	ST101	ST202	ST311	ST404	遺構外	総計
石器	Aa	6	12	16	7	6	4	19	20
	Ab	7		7	4		1	13	32
	Ac	5	9	20	6	2	1	8	51
	Ba	25	26	5	13	5	6	80	
	Bb	13	31	64	17	23	10	11	169
	Bc	15	99	118	92	26	18	66	434
	Bd	2	6	13	5	3	1		30
	Ca	2	23	30	12	7	2	4	80
	Cb	1	35	50	23	11	3	7	130
	D	0	2	2	3	1			8
	E	2	8	19	5	11	1	11	52
	不明								
	合計	53	250	365	179	103	46	145	1141
石器の未製品		3	8	9	2		3	33	
石器	A	3	1	1	1		1	7	
	Aa					1			
	Ab					2	3		
	B					1	1		
	C					2	2		
	Ca	1					1		
	不明	2	6	2		1		11	
	合計	2	10	3	2	3	9	29	
石錐	A								
	Aa	4	8	5	2		1	28	
	Ab	8	22	22	2		2	45	
	Ac	5	5	1		2	6		
	Ad	6	9	1	2		4	22	
	Ag						1		
	AK						6		
	B	6	3	5	1		3	38	
	Ba	1	5	7	3	4	2	5	27
	Bb	1	6	12	3	4		4	30
	Bc	2	4	3		3	2	5	19
	C	2	22	16	5	7	6	15	73
	D	2	4		2		8		
	E						2		
	F						2		
	不明	2	3	5	5	1		14	
	合計	8	64	72	38	28	11	41	262
石錐の未製品							1		
棒状 尖頭器	Aa	13	18	1	2	1	35		
	Ab	3	13	3	1		2	22	
	Ac	15	10	3	1	7	39		
	Ad	2	3				5		
	Ba	1	3	1	2	1	2	10	
	Bb	1	1	1	2			5	
	Bc	1	4	4	2	1		13	
	不明	12	11	8	1	2	1	35	
	合計	2	50	63	19	10	6	14	164
棒状尖頭器の 未製品							2		2
有邊石器							2		3
石錐	A	7	61	29	54	6	10	32	249
	Aa	9	69	94	39	11	15	50	287
	Ab	6	63	102	51	6	14	18	260
	Ac	4	33	31	20	3	10	15	116
	Ad					3	2	1	10
	B	3	34	39	22	1	3	14	136
	Ba	1	18	19	10			5	53
	Bb	2	14	47	7	2		2	74
	Bc	2	10	27	12	1	1	2	55
	Bd	2	1	11	7	2	1	2	26
	Be			1	3			2	6
	C	2	32	37	26	3	5	14	119
	Ca	2	42	56	39	7	12	30	188
	Cb	2	37	89	40	3	12	11	194
	Ce	10	19	15	1	2	11	58	
	Cd		1	2	1			4	
	D	1	2				3		
	Da	2	7	7	2	1	3	3	25
	Db	3	4		1			8	
	Dc	1	2	2		1	3	9	
	E						1		
	Fa	1	30	41	40	7	15	20	154
	Fb	3	2	4	1	2	2	14	
	Fc	9	18	18	5	3	6	59	
	Ed	5	3	3	1	2	1	13	
	F	4	11	14	8	1	9	67	
	不明	4	24	21	15	3	5	16	88
	合計	54	517	769	440	67	119	270	2236
石錐の未製品		2	1				3		

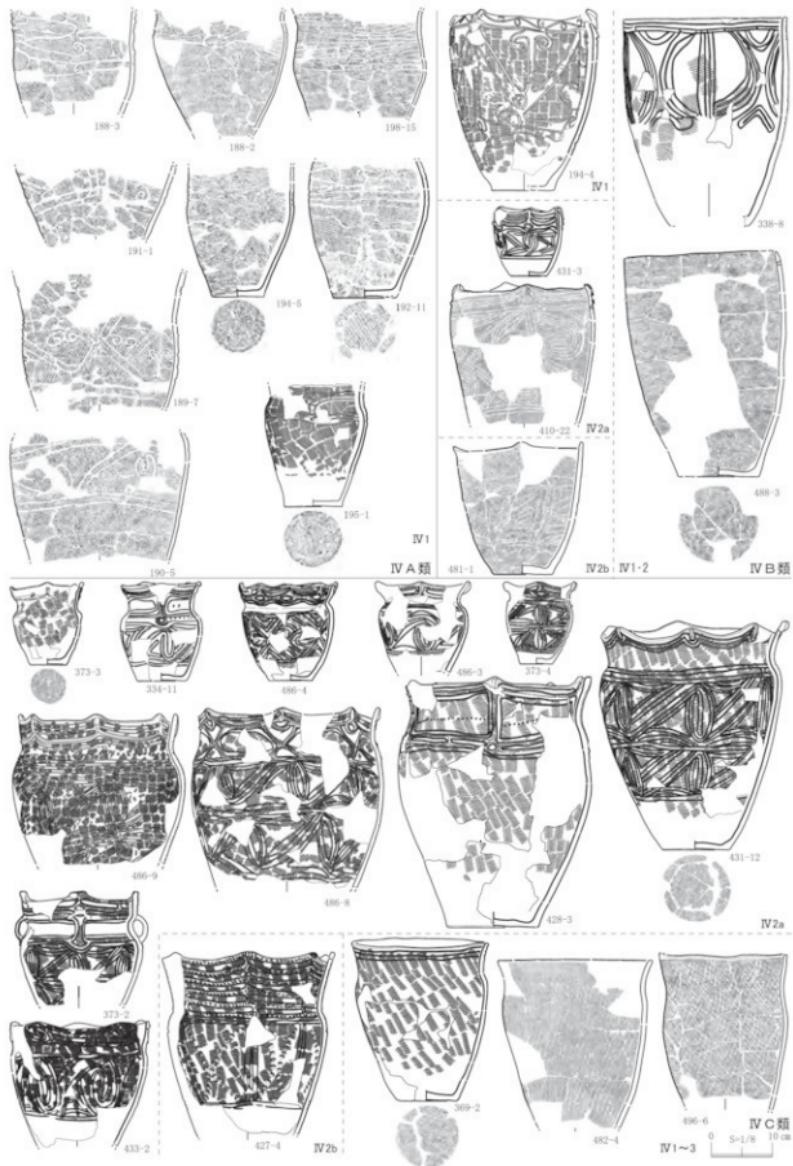
第68表 石器・石製品分類別出土点数2

器種	分類	遺構内	ST01	ST101	ST202	ST311	ST404	遺構外	総計
石核	A	3	2	1	1	2	3	12	1
	B	1	3	1	2	2	2	9	2
	C	1	1			2	4		6
	D	5				1	6		11
	E	1					1		2
	F	28	10	3	11	5	19	76	5
	G	10	16	15	3	5	17	67	6
	不明	59	1				60		1
	合計	73	57	28	7	18	8	235	8
扁平 打製 石器	A	1			1		1		3
	B			1	1		7	9	9
	C	3				4	7		7
	D	2				11	13		13
	E					3	3		3
	F	1				4	5		5
	H	2		2			6	10	10
	不明	6	2	3	1	2	34	45	45
	合計	15	2	4	1	3	70	95	95
石錐	A	2	5			11	18		
	B	1	2			2	5		
	C					1			1
	D					1			1
	E		1				1		1
	F	1				1	2		2
	不明					1	1		2
	合計	4	8			17	29		29
霰石	A		1			2	3		
	Aa	2	34	23	1	3	15	81	81
	Ab	5	13	12	3		13	46	46
	Ac	20	18		5		11	54	54
	Ad	13	5	1		6	25		25
	Ae	8	8	2		1	5	24	24
	B	1	3				4		4
	Ba	1	1	4			6		6
	Bb	1				2	3		3
	C	3	10	3	1		1	24	24
	不明	34	4				1	38	38
	合計	44	107	74	5	11	5	62	308
凹石	A					1	1		
	Aa	6	37	52	3	2	26	126	126
	Ab	28	159	197	2	10	10	101	507
	Ac	4	6	1			1	12	12
	B	2	3		2		2	9	9
	C	15	8		2		2	25	25
	不明	13	4		2		2	19	19
	合計	47	221	266	3	15	12	135	699
穿石	Aa	5	27	34	2	1	28	97	97
	Ab	14	54	48	2	2	31	151	151
	Ac	2	21	13	1	2	15	54	54
	B	1					1		1
	C	2	11	22	2	2	8	47	47
	不明	140	1				1	142	142
	合計	164	114	117	2	7	5	83	492
石皿	I Aa	6	2	15	1		5	29	29
	I Ab	4	9	9			5	22	22
	I Ba	1			2		1	4	4
	I Bb	9	2	6	1		12	30	30
	II	1	4	4			1	6	6
	II Aa	4	11	34	3	4	10	11	77
	II Ab	3	3	9	3	1	8	27	27
	II Ac	1	5	20	6	4	8	44	44
	II Ad	1	1	3			1	6	6
	II Bb	2					3	5	5
	II Ba		1					1	1
	II Bb	1	1	1			2		2
	II Be	1	1				1	3	3
	II Bd	4	3	4			8		
	II Bf	4	12				16		
	II C	2					2		2
	II D	6	2				6		6
	II E	6	2				6		6
	II F	6	2				6		6
	II G	6	2				6		6
	II H	6	2				6		6
	II I	6	2				6		6
	II J	6	2				6		6
	II K	6	2				6		6
	II L	6	2				6		6
	II M	6	2				6		6
	II N	6	2				6		6
	II O	6	2				6		6
	II P	6	2				6		6
	II Q	6	2				6		6
	II R	6	2				6		6
	II S	6	2				6		6
	II T	6	2				6		6
	II U	6	2				6		6
	II V	6	2				6		6
	II W	6	2				6		6
	II X	6	2				6		6
	II Y	6	2				6		6
	II Z	6	2				6		6
	II AA	6	2				6		6
	II BB	6	2				6		6
	II CC	6	2				6		6
	II DD	6	2				6		6
	II EE	6	2				6		6
	II FF	6	2				6		6
	II GG	6	2				6		6
	II HH	6	2				6		6
	II II	6	2				6		6
	II JJ	6	2				6		6
	II KK	6	2				6		6
	II LL	6	2				6		6
	II MM	6	2				6		6
	II NN	6	2				6		6
	II OO	6	2				6		6
	II PP	6	2				6		6
	II QQ	6	2				6		6
	II RR	6	2				6		6
	II SS	6	2				6		6
	II TT	6	2				6		6
	II UU	6	2				6		6
	II VV	6	2				6		6
	II WW	6	2				6		6
	II XX	6	2				6		6
	II YY	6	2				6		6
	II ZZ	6	2				6		6
	II AA	6	2				6		6
	II BB	6	2				6		6
	II CC	6	2				6		6
	II DD	6	2				6		6
	II EE	6	2				6		6
	II FF	6	2				6		6
	II GG	6	2				6		6
	II HH	6	2				6		6
	II II	6	2				6		6
	II JJ	6	2				6		6
	II KK	6	2				6		6
	II LL	6	2				6		6
	II MM	6	2				6		6
	II NN	6	2				6		6
	II OO	6	2				6		6
	II PP	6	2				6		6
	II QQ	6	2				6		6
	II RR	6	2				6		6
	II SS	6	2				6		6
	II TT	6	2				6		6
	II UU	6	2				6		6
	II VV	6	2				6		6
	II WW	6	2				6		6
	II XX	6	2				6		6
	II YY	6	2				6		6
	II ZZ	6	2				6		6
	II AA	6	2				6		6
	II BB	6	2				6		6
	II CC	6	2				6		6
	II DD	6	2				6		6
	II EE	6	2				6		6
	II FF	6	2				6		6
	II GG	6	2				6		6
	II HH	6	2				6		6
	II II	6	2				6		6
	II JJ	6	2				6		6
	II KK	6	2				6		6
	II LL	6	2				6		6
	II MM	6	2				6		6
	II NN	6	2				6		6
	II OO	6	2				6		6
	II PP	6	2				6		6
	II QQ	6	2				6		6
	II RR	6	2				6		6
	II SS	6	2				6		6
	II TT	6	2				6		6
	II UU	6	2				6		6
	II VV	6	2				6		6
	II WW	6	2				6		6
	II XX	6	2				6		6
	II YY	6	2				6		6
	II ZZ	6	2				6		6
	II AA	6	2				6		6
	II BB	6	2				6		6
	II CC	6	2				6		6
	II DD	6	2				6		6
	II EE	6	2				6		6
	II FF	6	2				6		6
	II GG	6	2				6		6
	II HH	6	2				6		6
	II II	6	2				6		6
	II JJ	6	2				6		6
	II KK	6	2				6		6
	II LL	6	2				6		6
	II MM	6	2				6		6
	II NN	6	2				6		6
	II OO	6	2				6		6
	II PP	6	2				6		6
	II QQ	6	2				6		6
	II RR	6	2				6		6
	II SS	6	2				6		6
	II TT	6	2				6		6
	II UU	6	2				6		6
	II VV	6	2				6		6
	II WW	6	2				6		6
	II XX	6	2				6		6
	II YY	6	2				6		6
	II ZZ	6	2				6		6
	II AA	6	2				6		6
	II BB	6	2				6		6
	II CC	6	2				6		6
	II DD	6	2				6		6
	II EE	6	2				6		6
	II FF	6	2				6		6
	II GG	6	2				6		6
	II HH	6	2				6		6
	II II	6	2				6		6
	II JJ	6	2				6		6
	II KK	6	2				6		6
	II LL	6	2				6		6
	II MM	6	2				6		6
	II NN	6	2				6		6
	II								

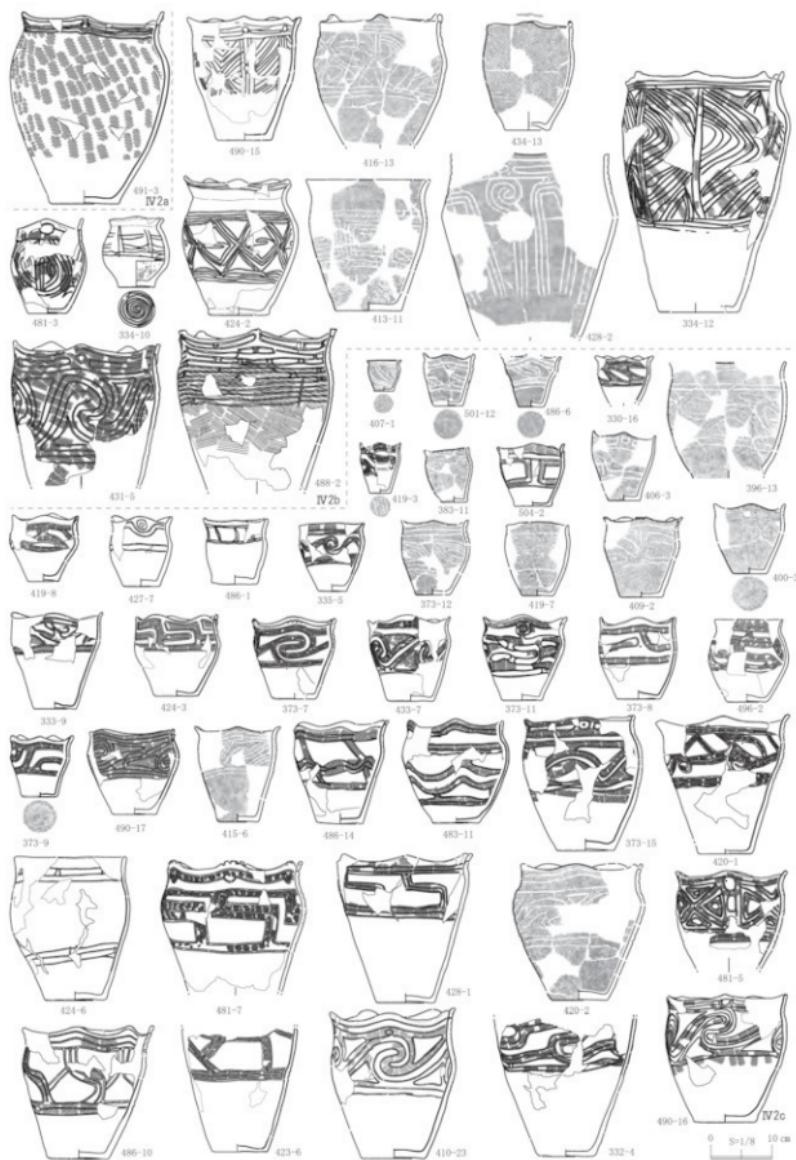


第580図 I群・II群・III群A類 a ~ c 種集成図





第582図 深鉢IV A・B・C類集成図



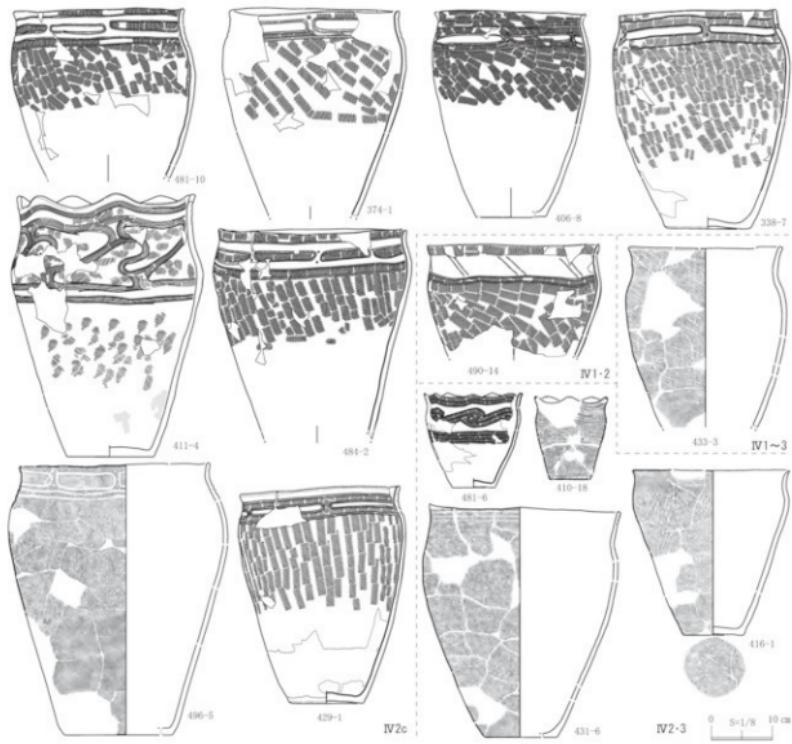
第583図 深鉢IVD類集成図 1



第584図 深鉢IVD類集成図2



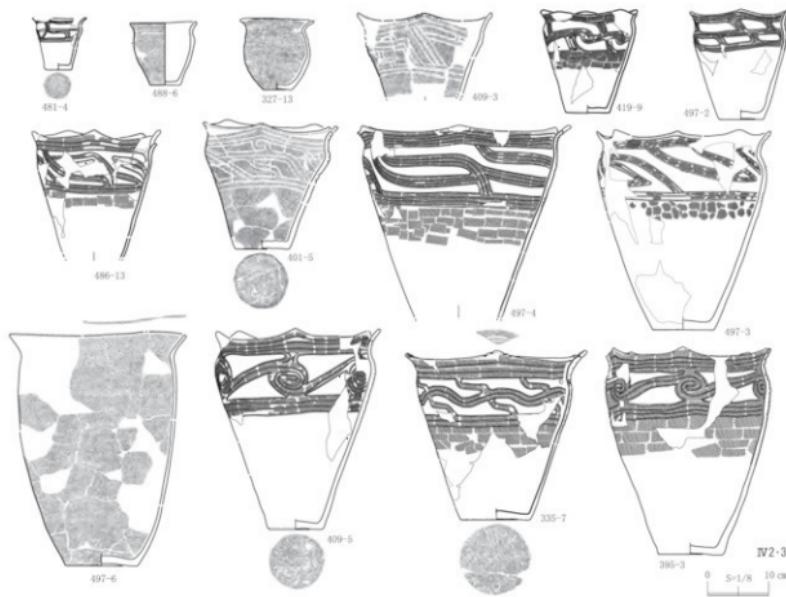
第585図 深鉢IVD類集成図 3



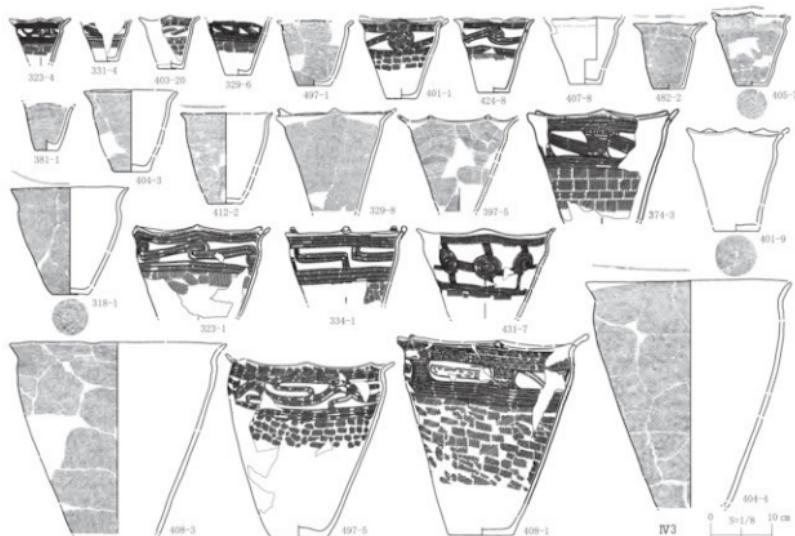
第586図 深鉢IV-D類集成図4



第587図 深鉢IV-D～E類集成図1



第588図 深鉢IVD～E類集成図2



第589図 深鉢IVE類集成図1



第590図 深鉢IV-E類集成図2